静寂の時間がいのちの根を養う

神渡良平

静寂の時間がいのちの根を養う

神渡良平

致知出版社

著者プロフィール

神渡良平（かみわたり・りょうへい）

1948年鹿児島生まれ。九州大学医学部中退後、新聞記者、雑誌記者を経て独立。取材国は50数カ国に及ぶ。38歳のとき脳梗塞で倒れ一時は半身不随となったが、必死のリハビリで再起。この闘病生活中に、人生はたった一回しかないこと、またどんな人にもなすべき使命があってこの地上に送られていることを痛感する。闘病中に起草した『安岡正篤の世界』がベストセラーに。以後、次々にベストセラーをうみ出し、講演や執筆に大多忙となる。

代表作に『宰相の指導者　哲人安岡正篤の世界』『安岡正篤人間学』（講談社＋α文庫）、『安岡正篤　人生を拓く』（講談社＋α新書）、『宇宙の響き――中村天風の世界』『下坐に生きる』（致知出版社）、『星降るカミーノ――魂の旅路』『主題のある人生』『人は何によって輝くのか』（ＰＨＰ研究所）、『マザー・テレサへの旅路』（サンマーク出版）などがある。

静寂の時間がいのちの根を養う

平成十八年五月二日第一刷発行

著　者　神渡良平

発行者　藤尾秀昭

発行所　致知出版社

〒107-0062 東京都港区南青山六の一の二十三

TEL（〇三）三四〇九―五六三二

印刷・製本　中央精版印刷

落丁・乱丁はお取替え致します。（検印廃止）

©Ryohei Kamiwatari　2006 Printed in Japan

ISBN4-88474-745-3 C0095

ホームページ　http://www.chichi.co.jp

Ｅメール　books@chichi.co.jp

はじめに

赤道直下のケニア、アンボセリの大草原（サバンナ）――

真夏（乾季）のキリマンジャロ山の頂上が雪の冠をいただいて、燦然（さんぜん）と輝いている。他に真っ白い雪など見かけない赤道直下であるだけに、ただただ神々（こうごう）しい。

「これが五八九五メートル、アフリカ大陸第一の高峰か！」

私はキリマンジャロの北の裾野に広がるサバンナに立ち尽くし、ただ呆然（ぼうぜん）と見上げていた――。

真っ白な王冠のように被（かぶ）さっている雪の冠の一番西にあるアスカリ・ピークの直下にあるラッシェル氷河が、遠目にもよく見える。このアスカリ・ピークはマサイ語で「ヌガイエ・ヌガイ（神の家）」と呼ばれて敬われているという。まさにキリマンジャロは神の家だ。

ヒマラヤは現地の人に「神々の座」と呼ばれて尊崇されているそうだが、雪に覆われた白い峰々は確かにそんな崇高なものを感じさせる。

人間は崇高なものに出合うと、思わず身が引き締まり、襟を正す。そして生活の糧を得ることのために汲々としていた自分を反省する。

「私の生き方はこれでよかったのだろうか」

日常生活では崇高なものに出合うことが少ないだけに、その出合いが契機となって、自分の生き方を振り返る。私たちを見守り導いている天は、折に触れて、

「お前の生き方はそれでいいのか――」

と、問いかけている。それは最初小さなサインで示される。

あるいは旅先で海に沈む真っ赤な夕日を見ているとき、あるいは真剣に内観者の話を聞いているとき、あるいは先人が書き残した書物に読みふけっているとき、小さなサインが示される。それを見逃さずに追究すると、メッセージは次第に形を成していく。するとますます天に感応するようになり、泰然不動の自分が形成されていく。それと同時に、着実に仕事は実っていく。

感応体としての人間とは、『宇宙の響き――中村天風の世界』（致知出版社）で書いたよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

うに、哲人中村天風がヒマラヤでの修行を通してつかんだものだ。人間とは感応する存在であり、天と呼応してこそ自分という存在を超えた大きな仕事ができるというものだ。

『宇宙の響き』にそう書いてから十年が経ったが、私はますますその感を強くしている。

それぞれの人間に与えられている能力は、天と自分とを遮(さえぎ)っている障壁(ブロック)が外れたとき、存分に発揮されるものである。従って自分の能力を最大限に発揮したかったら、ブロックを外し、天のエネルギーやメッセージが自由に流入できるようにする必要がある。

天はいつでも用意ができている。問題は人間の側だ。

人間があまりにも忙しくしていて、天のメッセージに耳を傾ける余裕がないときは、天のメッセージは素通りしていく。そうではなく、受け入れ態勢ができていると、限りなく流入してくる。

だから、独り静かな時間を持つことが大切だ。精神の成熟に、静寂な時間は欠かせない。そうして天と自分との合作だと自信を持って言えるような仕事が生まれてくるのだ。

ここに収録したものは、いろいろな雑誌に書いたもののうち、精神の成熟と静寂に関するものを集めている。草木は春に芽立ちし、夏の盛りに思いの限り繁茂し、秋に入るとじ

っくり実りに入る。人間の精神もそれと同じで、実るためには静かな熟成の秋(とき)が必要なのだ。群を抜いた作家であった芹沢光治良(こうじろう)の信条、

「文学はもの言わぬ神の意思に文字を与えることである」

のように、それぞれの仕事がもの言わぬ神の意思に形を与えたものになるよう、努力したいものである。そういう志を持った人に本書を捧げたい。

本書の製作でも致知出版社の名伯楽、大越昌宏さんの大いなる助力をいただいた。ここに名前を挙げて感謝する次第である。

平成十八年四月吉日

著　者

静寂の時間がいのちの根を養う　目次

はじめに　1

第一章　永遠なるものへの思慕

一　キリマンジャロの雪　12

二　民族の血を呼び覚ます熊野古道　47

第二章　魂の夜明け

一　人間の内面の世界は宝の宝庫だ！　90

二　心を揺り動かした一冊の追悼詩集　96

三　山岳修行によって自己研鑽に励む——市川覚峯師のスピリット道場探訪記

第三章　安岡正篤が説く東洋の知恵

一　自然を愛したエマーソン　130
二　「六中観」が説く人生の処し方　133
三　宇宙意識が風韻をつくる　143
四　天地の理法に則して自分を生かす　146
五　創造的少数者は孤独に耐える　149
六　心願に生きる　153
七　笑顔は幸運の扉を開く　156
八　自分を棚の上に置き忘れてはならない　159
九　自分の持ち場で一隅を照らそう　162
十　社風をつくる　165
十一　社会の木鐸となろう　171
十二　知識を見識、胆識まで高める　174

第四章　一隅を照らす人々

一　寂しさをやさしさに替えて――鎌田安政さんのこと　180
二　夫の死という試練がもたらしたもの――平田和子さんのこと　186
三　毎朝一万歩で、百歳まで生きる――河越大郎さんのこと　192
四　環境は自分の生き方の表れだ――金子博さんのこと　197
五　気功は動物をもリラックスさせる――池田眞三さんのこと　202
六　死の床は魂を浄化する場所だった――山本明彦さんのこと　207

第五章　人生の彩り

一　「だっこのしゅくだい」に見た母の愛　216
二　父の愛に包まれて　221
三　死に臨んで仏様のようになった父　227

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

四　森信三がいま見直されている理由　230
五　随所に主となれば、立処皆真なり　238
六　星空を仰ぎながらのナイトウォーク　241
七　ブラジルで開かれた掃除に学ぶ会世界大会　246
八　オン・デマンドで授業を受ける通信制大学　251

第六章　静寂がもたらす精神の王国

一　読書の楽しみ　256
二　弟橘姫が日本武尊に捧げた犠牲的愛　262
三　我れ事において後悔せず　268
四　スピリチュアルペインは天の恵みだ！　271
五　人生はご恩返しだ　284
六　静寂と風韻　288

装幀——松吉 太郎
写真——南浦 護

第一章　永遠なるものへの思慕

一　キリマンジャロの雪

一月十一日午後十一時十五分、私たち二十一名はエミネーツ航空３１７便で関西空港を飛び立ち、十一時間半フライトしてアラブ首長国連邦の首都ドバイに着いた。ドバイで同航空７１９便に乗り換え、さらに五時間フライトして、ようやくケニアの首都ナイロビに着いた。

満開の濃いショッキング・ピンクのブーゲンビリアや背丈の倍もあるポインセチアが真っ赤な花をつけて歓迎してくれていた。ピーコック・フラワーとも呼ばれているホウオウボクも樹上にエンジ色の花をつけている。さすが赤道直下のアフリカだ。すべてがカラフルで、色合いがはっきりしている。

ナイロビに着いたのは十二日正午だったので、そこからそのままさらに二百五十キロ、

約四時間半ドライブして、タンザニアとの国境に広がるアンボセリ国立公園に向かった。

これまで私は世界九十か国ほど訪問しているが、アフリカはまだ足を踏み入れたことがない。ナイロビは南緯一・二度、つまり赤道から南へ百四十キロしか離れておらず、しかも真夏（乾季）だから大変暑いところかと思っていたが、海抜千七百メートルの高地であることから、気温は十九度しかなく、大変さっぱりした気候である。日本の代表的避暑地である軽井沢のような気候である。そういったら、信じられないという顔をする人が多いが、私もその一人だった。

小雨季の十一月頃のナイロビは大木のジャカランダが紫色の花をいっせいにつけるので、とても美しいと聞いていた。しかし、残念なことにその時期を過ぎていたため、花の名残（なごり）がチラホラ見えるだけで、咲き誇っている花は見ることはできなかった。ジャカランダは日本でいえば、桜の花に相当するようなシンボリックな花である。

私たちは五台のサファリカーに分乗した。ナイロビの約百五十キロ南方にある、ケニアとタンザニアの国境の町ナマンガまでは舗装道路で、快適なドライブを楽しむことができたが、ナマンガで左折すると、舗装してないデコボコの砂利道に入った。

車窓から、樹上がテーブルのように平らに広がったアカシアが見える。アフリカの写真

に、キリンが長い首を伸ばして葉っぱを食べているのがよくあるが、あの木だ。大柄なドライバーのチャゲさんによると、アカシアは四十種類ぐらいあって、その形状からアンブレラ・ツリーとか、テーブル・ツリーなどと呼ばれているそうだ。

赤茶けて乾ききった大地に、鈴のような実をつけている灌木がたくさん生えていた。チャゲさんが、

「あれもアカシアの一種で、アーントガード・アカシアといいます。動物に食べられないように、トゲで自分をガードしているんです。あの鈴のような実の中に、アリが住んでいるんです。風が吹くと、カラカラと涼しげな音を立てます」

と説明してくれた。ドライバーは私たちにはもの珍しいアフリカの風物を説明してくれ、そのたびに私たちは、フーン、フーンとうなずいて感心した。

前の自動車が巻き起こす猛烈な砂埃（すなぼこり）に辟易（へきえき）しながら、ガタガタ道を疾走していると、アーネスト・ヘミングウェイの『キリマンジャロの雪』（新潮文庫）でも有名なキリマンジャロが間近に迫ってきて、一同、

「アアアーッ」

という感嘆の声を上げた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com